

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



平成 30 年度版

まえがき

福祉作文コンクールは昭和52年から始まり、今年で42回目となりました。次代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心が芽生え、だれでもが「ともに生きる」社会が実現することを願って実施してまいりました。

今年、県内の小・中学校合わせて275校から10379編の応募がありました。児童・生徒数が年々減少していく中で、昨年より758作品多い参加となりました。

小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を行い、このたび、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選された56編の作品の中から、最優秀賞16編を掲載いたしました。どの作文も、体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが自分自身の言葉で丁寧にかかれています。広く県民皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、たすけあい、支え合えるような優しい気持ちたちが社会全体に自然と広がっていくことを願っています。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞の作品は、題名・学校名・氏名を掲載させていただきました。なお、最優秀賞を受賞された作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しています。結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々に、心よりお礼申しあげます。また、ご協力くださいました神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株)テレビ神奈川、(株)神奈川新聞社、(公財)日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申し上げます。

平成30年12月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局
 放送部部長
 株式会社テレビ神奈川
 営業本部 営業推進室長兼事業推進部長
 株式会社神奈川新聞社
 クロスメディア営業局 出版メディア部 部長
 公益財団法人日揮社会福祉財団
 常務理事兼事務局長
 神奈川県福祉子どもみらい局福祉部
 地域福祉課 課長
 神奈川県立総合教育センター
 企画調整部 企画広報課 指導主事
 社会福祉法人神奈川県共同募金会
 常務理事
 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
 常務理事

青田浩一
 遊馬秀樹
 鈴木木毅
 木高正志
 田熊徹
 海野真一郎
 八木明
 石黒敬史

(順不同/敬称略)

第42回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

介護を経験して

聖セシリア小学校（大和市）

六年 山崎 琴子…………… 1

神奈川県教育長賞

いろいろなひとといっしょに

横浜市立桜台小学校（保土ヶ谷区）

一年 栗田 和歩…………… 3

日本放送協会横浜放送局長賞

ろう人ホームでみつけたえがお

海老名市立杉久保小学校

二年 新納 未来…………… 5

テレビ神奈川社長賞

ずっとそばにいるよ

横浜市立北方小学校（中区）

五年 小阪 英輝…………… 7

神奈川新聞社長賞

手話を学んで

平塚市立港小学校

四年 新倉 桜苗……………9

ふれあい賞

オストメイトって何？

厚木市立愛甲小学校

六年 杉山 美月……………11

神奈川県共同募金会長賞

ともに生きるということ

伊勢原市立比々多小学校

六年 加藤 琉聖……………13

神奈川県社会福祉協議会長賞

あく手のまほう

横浜市立師岡小学校(港北区)

三年 堀江 海翔……………15

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

優しい声かけ

平塚市立浜岳中学校

二年 川嶋 大登……………17

神奈川県教育長賞

車椅子から見た世界

葉山町立南郷中学校

三年 土屋 虹……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

介護老人福祉施設での出会い

洗足学園中学校(川崎市高津区) 一年 田中あずき……………23

テレビ神奈川社長賞

お兄さん、手伝って

秦野市立鶴巻中学校 二年 安田洸志朗……………26

神奈川新聞社長賞

自分にあたえられた人生の課題

平塚市立旭陵中学校 三年 星野 章太……………29

ふれあい賞

憧れの職業に

南足柄市立南足柄中学校

三年 奥津 ひな……………32

神奈川県共同募金会長賞

僕にできること

伊勢原市立中沢中学校

一年 白鳥 陽也……………35

神奈川県社会福祉協議会長賞

どんな障害者も友達

鎌倉市立岩瀬中学校

二年 原 有穂……………38

優秀賞・準優秀賞入選者名簿……………

41

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

介護を経験して

聖セシリア小学校（大和市）

六年 山崎 琴子

私のひいおばあちゃんは、二年前、がんで亡くなりました。最後の一年間、私はひいおばあちゃんの介護をしていました。

一番はじめに入院したのは、とても大きな病院でした。病院での食事は、サラダも魚も全部、ゼリー状のトロトロのものでした。普通の食事では、むせて肺炎を起こす可能性があるからだそうです。けれども、ひいおばあちゃんは、いくら家族で説得しても、食事に手をつけず、栄養入りの飲み物を少し飲むのがやっとで、だんだんと衰弱してしまいました。わざわざ食べやすくしてあるのに、なんで食べないのだろう。みんな心配しているのに。私はそう思い

ました。でも、ある時、「いつものかたいものが食べたいよ」と呟くのを見て、ひいおばあちゃんの以前の生活を思い出しました。旅行が大好きで、色々な事を話してくれた優しいひいおばあちゃん。それと、目の前のベッドに横たわっている姿は別人のようでした。入院してから一ヵ月半、ひいおばあちゃんはホスピスに移るようになりました。その食事は、見た目も匂いもおいしそうな普通のごはんでした。おやつの間では、ひいおばあちゃんが前から好きだった、和菓子や果物を一緒に食べ、私も楽しい時間を過ごすことができました。

ひいおばあちゃんが亡くなった後、私は、あらゆる死のリスクを取り除き、一秒でも長く生きるのと、それより短くても、最期まで人間らしく生活するのと、どちらが幸せなのかと考えました。ひいおばあちゃんの残りの時間を共に過ごして、一番強く感じたのは、介護されている人の小さな楽しみや希望を叶えてほしいということです。最後までその人の人生に生きがいを感じさせてあげること、それが介護のとても大切なところだと思います。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

いろいろなひとといっしょに

横浜市立桜台小学校（保土ヶ谷区）

一年 栗田和歩

わたしは、おとうさんがくれたビーズのゴムをたいせつにしています。なつやすみにおとうさんのしごとばで、わたしもアクセサリーをつくれることになりました。たのしみだけど、どきどきしました。どんなところで、どんなひとがいるかしんぱいだったからです。

「おとうさんは、ふくしのしごとをしているんだよ。」

おかあさんがいました。わたしは、ふくしということばのいみがわかりませんでした。おとうさんとおかあさんはそうだんして、

「いろいろなひと、みんながえがおでいられるようにすることだよ。」
と、おしえてくれました。とてもいいことだなとおもいました。

おとうさんのしごとばは、しょうがいのあるかたのさぎょうしょです。たくさんのひとがはたらいていて、それぞれがおしごとをしていました。しゃべっているひともしゃべれないひともありました。やさしいえがおのおじいちゃんもいました。おなじことばをくりかえしておちつかないひともありました。かおをみたらなきそうだけど、わらっているようにもみえました。

「おうちにかえりたい。」

というそのひとに、おとうさんはやさしくこえをかけておちつかせようとしていました。わたしもおうちにかえりたくなるきもちはわかります。だけど、おとうさんみたいにやさしくこえをかけることはできなかつたので、おとうさんはすごいなとおもいました。

わたしには、まだわからないことも、できないこともたくさんあります。でも、このおとうさんのしごとばのひとといっしょにつくったヘアゴムをしようかいることはできます。どんなひとがつくっているのか、ともだちにおはなししてみようとおもいました。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ろう人ホームでみつけたえがお

海老名市立杉久保小学校

二年 新納 未来

わたしは、夏休みにかぞくで、ろう人ホームのうりようさいに行きました。いくことになつたきつかけは、おとうさんがかいごつきろう人ホームにかかわるしごとをしていて、「ゆかたにきがえて、みんなで行こう。」とさそつてくれたからです。

ろう人ホームの中に入ると、おまつりの音がながれていたり、さまざまな色のちょうちんがかざつてあつたりして、わたしはすぐにおまつり気分になりました。

わたあめをたべていると、車いすにのつているおじいちゃんが、「このぬいぐるみをおじょうさんあげるよ。」と、わらいながら話しかけてくれました。わたしは、「ありがとうございます。」と言って、それをうけとりました。すると、ぬいぐるみをもつたのはわたし

のほうなのに、まるでおじいちゃんがもらったかのようによろこんでくれました。「すてきな
おねえさんね。」と言って、わたしの頭をなでてくれたおばあちゃんや、「あそびにきてくれ
てありがとう。」と言って、あく手をしてくれたおじいちゃんもいました。

ふと、まわりを見てみると、みんながたのしそうにわらっていることに気がつきました。
おじいちゃんやおばあちゃんのえがおはとてもかわいくて、わたしはしあわせな気もちでい
っぱいになりました。

また、おとうさんが、おじいちゃんやおばあちゃんとはなす時に、こしをかがめ、ひざを
ついて、目線を合わせていることに気がつきました。わたしは、「おとうさんはやさしいな。」
とかんじました。

このけいけんから、おとうさんのように、思いやりのこころをもちつづけたいと思うよう
になりました。そして、おじいちゃんやおばあちゃんのえがおに、またあいに行きたいです。

最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

ずっとそばにいるよ

横浜市立北方小学校（中区）

五年 小阪 英輝

「ひで君、大きくなったねえ。」

ぼくがおばあちゃんの家に行くと、いつもニコニコしながらおばあちゃんが言うセリフは決まっている。「こんにちは。」ぼくは、思いやりが深く陽気で楽しいおばあちゃんに会いに行くことが好きだ。

でも、ある日、おばあちゃんがこわれてしまった。静かだし、何より笑わなくなってしまった。ぼくは、すごくびっくりした。お父さんに理由を聞いたら、「老人性のうつ」といって、心が風邪を引いている状態になってしまったそうだ。ぼくは、お母さんに、「ただ寄りそって、受け入れてあげるだけでいいんだよ。」と教えてもらった。

でも、ぼくはいつもとちがうおばあちゃんが何だか恐くてそばに行けなかった。とても悲しいし、頭が落ちつかないし、心が痛いし、早く自分の家に帰りたいと思ってしまった。

夕方になり一人で庭で遊んでいてふと空を見上げると、きれいなまっかな夕日と三色に輝く空が広がっていた。

「？」

急にだれかがぼくの右手をつかんだ。緊張してちらっと見たらおばあちゃんだった。

「どうしよう。」ぼくは体が固まって動けないでいた。

「ひで君、大きくなったねえ。」

ふいにおばあちゃんがつぶやいた。

ああ、おばあちゃんはおばあちゃんだ。少しこわれてしまったけれど、おばあちゃんの手はいつもと同じ温かさだ。ぼくがもつと大きくなって強くなっておばあちゃんの事を守るよ。

ぼくは、この手のぬくもりと三色の空を決して大人になるまで忘れない。ぼくが大人になるまで、ずっと長生きしてね。

「ずっとずっと好きだよ。おばあちゃん。」

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

手話を学んで

平塚市立港小学校

四年 新倉 桜苗

私は、昨年の五月から手話教室に通っています。手話を学びたいと思ったのは、障害がある人ない人関係なく、困っている人がいたら声をかけてあげられたらいいなと思ったからです。手話を知ったのは、テレビ番組の手話ニュースがきっかけです。まず手話を覚えて耳の聞こえない人の手助けが出来たらいいなと思いました。

手話教室は、毎週木曜日の午後七時から午後八時半まで平塚市福祉会館で開かれていて、私は父と母といっしょに通っています。この教室の先生は耳の不自由なるう者の方で生徒は小学生から七十才代まで、はば広い年代がいます。ほとんどの生徒が大人なので、きんちょうします。けれど、先生や生徒みんな笑顔でやさしくて、手話をつかってゲームをしたりす

ることもあり楽しいです。それに、ろう者の方だけでなく、様々な年代の人とふれ合うのも良い機会になっていたので、今まで続けられたのだと思います。手話教室で一番うれしかったことは、先生や生徒の方々に、「上手だね。」とほめられたことです。がんばってもっと上手になりたいと思い、家で父と母を相手に練習をしました。特に、指文字のしりとりにゲームは楽しみながら指文字を覚えることができました。

手話教室に通う前、私は、ろう者の人達は、不安でつらい気持ちなのかと思っていました。なぜなら、もし私の耳が聞こえなかったら、まわりの人や物事がこわくて外に出ることがむずかしいと思うからです。しかし、ろう者の方々と出会い、笑顔で生き生きとしている姿を見て、すごいと思いました。

これからも手話教室に通い続けて、スラスラと手話で会話ができるようになりたいです。そして、耳が聞こえなくて困っている人がいたら助けてあげたいと思います。

最優秀賞

ふれあい賞

オストメイトって何？

厚木市立愛甲小学校

六年 杉山美月

私の家には、オストメイト トイレがあります。家に来た人が、ちょっと広い洗面台と間違えることがあるので、先に「それは人工肛門を使用している人のトイレです。」と、説明します。

私のおじいちゃんは、いっぱい遊んでくれる優しい人です。でも直腸がんになり人工肛門になると先生に言われた時、「死んでもいいから、人工肛門はつけない。だから手術はしない。」と言っていました。人工肛門をつけたら、大好きな温泉も行けなくなるし、障害者になるならこのまま、死んだほうが良いと言っていました。そんなおじいちゃんを、みんなで説得して手術をするまで1年かかりました。4センチ以上あったしゅようは、放射線と抗がん剤で

小さくなり、手術では、全部取ることができました。

手術後のおじいちゃんは、初めの数年は温泉旅行では貸切風呂に入っていました。今では大浴場にも行けるようになりました。パウチという袋がお腹の下についていますが、周りを汚すこともお湯が汚れることもないということを、もつとみんなに知ってもらいたいです。そして、多目的トイレに設置されているオストメイト トイレは、パウチの中にたまった便を大きな洗面台のような所に流してシャワーで汚れを流します。これを外の普通の公衆トイレにひざをつけてするのは本当に大変です。おじいちゃんが手術した頃に比べると今は、シヨッピングセンターや高速道路にも設置されていて、どこでも安心して行けるようになりました。

だから、おじいちゃんのように手術を悩んでいる人がいたら、普通に過ごせるようになるので、「もつと、長生きして！」と言いたいです。そして、いろいろな人に多目的トイレの大切さも広まるとうれしいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

ともに生きるということ

伊勢原市立比々多小学校

六年 加藤 琉聖

2年前、相模原市で起こった津久井やまゆり園での事件の後「ともに生きる」というポスターを街中でよく見るようになりました。神奈川県では、ともに生きる社会かながわ憲章を定めているそうです。やまゆり園の事件で犯人は意思で通できない人間は生きる価値がない、と主張しているそうです。僕の弟は最重度の知的障害と自閉症があります。みなとといいます。言葉はほとんどしゃべれません。オムツがとれたのも小学3年で遅めでした。確かに障害があるのはいわゆる「ふつう」ではありません。泣いても何が原因か分からないこともあります。でも、決して意思のない人ではありません。伝える手段が難しいだけでみなとにもしたいこと、楽しいこと、悲しいことたくさんあります。

みなどと外にいる時に困っていることがいくつもあります。指しゃぶりすることや、突然大きな声を出すことです。指しゃぶりは落ちつくようです。声は嫌なことがあった時やハイテンションになった時に出てしまいます。4年生で身長も高いみなどが指しゃぶりをしていると、びっくりして見られたり、大きな声を出すとおどろかれます。声を出さないよう注意するともっとひどくなる事もあります。おどろかれてしまうのは、みなどのような障害を知らない人が多いからだと思います。知らないと怖いし、特別に見えるのです。僕にとってみなとは可愛い弟です。少しずつ我慢出来るようになってきたり、ゆっくりだけ成長しています。ともに生きる社会を作るためには、知らないから仕方がないではなく、知ろうとする努力が必要です。勉強の中で障害を取り入れたり、積極的に障害のある人との交流をしたり出来ると思います。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

あく手のまほう

横浜市立師岡小学校（港北区）

三年 堀江海翔

「あく手って、なかよくなれるまほうだな。」これは夏休みにぼくが気がついたことです。ぼくは、この夏しようがいがある子が色々なスポーツにチャレンジするイベントの、お手つだいボランテアをしました。

はじめは、しようがいがある子に、どうせしたらいいかわからなくて、ふあんな気もちでしたが、大人のボランテアの方から、「目を見て話すこと。」と、「名前をよんであげること。」そして、一番大切なのは、スポーツをした後に右手と右手であく手をして、「ありがとう。」ということだと教えてもらいました。

イベントが始まって、はじめは名前をよぶのも、目を見て話すのも、ドキドキして、小さ

な声しか出せませんでした。でも時間がたつにつれて、だんだんなれてきて大きな声が出せるようになりました。はずかしくていやだなあと思っていたあく手も、やってみたらすくいやな気もちがきえました。そして、友だちになれた気がしました。ぼくは、あく手つてなかよくなれるまほうだなと思いました。その日はさいこうの日になりました。いろいろな子と、あく手してなかよくなれました。どきどきから始まったボランテニア体けんだったけれど、終わった時にはすつきりした気持ちとあたたかい気持ちで心がいっぱいになっていました。

ぼくがしようがいをもっている子とあく手でなかよくなれたみたいに、人と人はもつとあく手をすると思います。友だちとけんかをしてしまった時も、かなしい気持ちになっている子とも、あく手をするのでなかよくなれると思います。

手と手をにぎるだけのかんたんな「あく手」だけれど、あく手には心があたたかくなるすごいまほうがあると思いました。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

優しい声かけ

平塚市立浜岳中学校

二年 川嶋 大登

「はあく。」病院の待合室で、ため息が聞こえた。僕は顔を上げると、五十歳位の女の子が、ため息をついていた。険しい顔をしてイライラしているように見えた。その隣には、車椅子に乗った五十歳位の男の人が黙って静かに座っていた。たぶん夫婦だろうなと思った。その男の人が、申し訳なさそうに小さな声で、「トイレに行きたい。」と言った。その女の子はいきなり大きな声で「なんで家でしてこなかったの！」と男の人に怒鳴りつけていた。車椅子を怒りまかせに強く押し、トイレのドアに男の人がぶつかってしまったのではないかというぐらい雑な対応で、男の人に向かって、「一歩くらい歩けるでしょ！歩いてよ！早くしてよ！」

と怒鳴り散らしていた。

その病院のトイレは、スペースがあまりないみたいで、男の人が、うまくトイレが出来ないようだった。騒ぎを聞いた、病院の受付の人が、介助しに来た。受付の人が、トイレのドアを足で押さえながら男の人を支え、車椅子からトイレの便座に移動させようとしているのが、僕からちょうど見えた。でも、受付の人だけでは、なかなか思うように移動出来ず、受付の人が女の人に、「私を支えている間に、車椅子を後ろへ引いてもらってもいいですか？」と女の人に頼んでいた。女の人は驚いた顔をして、「はあ？私ができるの？なんで手伝わなくちゃいけないの？」と、大きな声で受付の人に言った。そのやりとりを見ていたおじさんが立ち上がり、トイレの所まで歩いて、何も言わずに手伝った。トイレはなんとか間に合ったみたいだった。「ありがとうございます。」受付の人が、おじさんにお礼を言った。女の人は知らん顔をしていた。

僕はその光景を、他の患者さんと、ただ見ているしか出来なかった。僕は、大きな声で怒鳴る女の人に対して、恐怖心と悲しい気持ちとムカつく気持ちでいっぱいになった。ひどい人だと思った。自分のだんなさんなのに、あの態度は許せない、だんなさんが可哀いそうだ！と思ったその時だった。

「介護は大変だよ。あなたも少し休んで。」と、手伝ったおじさんが、女の人に声をかけていた。女の方は黙って下を向いておじぎをした。少し泣いているようにも見えた。

僕はそれを見て、心臓がキュッと苦しくなった。女の方は辛い思いをしていたんだ。人前

で自分の家族を怒鳴りたい人なんていない。誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまっていたのかも知れない。

僕はこの体験を機に、自分が変わりたいと思った。体の不自由な人や、お年寄りの人が困っていたら助ける、何か手伝える事があつたら進んで行えるようになりたいと思つた。

そしてあの時感じた、僕には全然思いもつかなかつた大切なこと。それは、介護する人に優しい声かけが出来る人になること。僕はそんな人間になりたいと強く思つた。僕は、今でもあの時のおじさんの姿を忘れることが出来ない。いや、忘れない。

僕もおじさんのように介護している人に勇気を出して優しい声かけをしていきたい。その優しい声かけひとつで、固まった心がほぐれその人が自分らしくいる事が出来て、心に余裕を持つて大切な人を喜んで介護する日が来ると思う。

一人で抱え込む介護ではなくて、地域全体、そして日本全体で、みんながみんなを笑顔で介護する世の中にしていきたい。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

車椅子から見た世界

葉山町立南郷中学校

三年 土屋

虹

みなさんは体の不自由な方にどんな接し方をしますか。人それぞれだと思いますが、普段からその状況を考えている方も少ないでしょう。僕はある経験から、多くの人にこのことを考えてほしいと思いました。

おとしの年末、僕はスノーボードをしていて木にぶつかり、大腿骨をひどく骨折しました。数時間かかる大きな手術を受け、その後九ヶ月間、それまで当たり前だと思っていたたくさんのことができなくなりました。今振り返ってもうんざりする経験でしたが、僕はこの怪我から、大切なことを学びました。

一つめは体の不自由な人にとって街がどんなふうに感じられるかということです。僕は手

術の後数か月は足をつくことを禁じられたため、歩くことができなくなりました。外に出るときは車椅子を使わなくてはなりませんでした。すると、いつもとは全く違う世界が広がっています。これまで何とも感じなかった小さな段差も乗り越えるのにひと苦労しました。自分でも歯がゆいし、周りの人が僕にいらついているのではないかなどと考えて、周りからの視線がとても嫌でした。そのときの僕は恥ずかしくてその場から消えたいと思うほどでした。周りの視線は人それぞれで、同情してくれる人もいましたが、見るからに迷惑そうな表情をされることもありました。僕はそのとき家族といたので、まだ心の支えもありましたが、もし一人だったら、もつとつらい気持ちになつていたかもしれません。

また、車椅子で街の中の通りを行くと、自分の目線がいつもより低いので遠くまで見通せません。人が多いところでは周りがよく見えないし、車の正面の高さが自分の目線と同じくらいなので怖さも感じました。街で時々車椅子の人を見かけますが、みんなこんな感覚でいたのだと初めて理解しました。僕が車椅子でしか外出できなかった期間は数か月ですし、いつも家族と一緒にだったので本当に怖い経験はしませんでした。一生車椅子に頼らなければならぬ人にとつて、街のあり方は切実な問題だと思えます。

僕は毎週リハビリに通っていました。そこには、僕より重い怪我をした人、病気で体が不自由になった人、脚や腕を失ってしまった人などたくさんの方がいました。僕自身は時間がかかるが必ず治ると言われていたので、いつかは「当たり前」が戻ってくるとわかっていました。それでもリハビリはつらい時がありました。そんな時僕を励ましてくれたのは、同じ

場所にはリハビリに来ていた人たちでした。ある二十代の男性は重い怪我をして一生障がいを負っていかねばならないということでしたが、とても元気でいつも楽しそうな人でした。怪我に対しての思いやこれからどうするかなどを話しながら、僕を励ましてくれました。ほかにも何人もの人たちが僕に声をかけてくれました。みな明るく、たくさんの夢をもっていました。僕が同じ立場だったら考えられないことです。もう大好きな運動ができないとか、自由に出かけられないなどとネガティブな考え方をすると思いますが、でも、この人たちはこれから見据えて励ましあっていました。僕は胸が熱くなり、尊敬の気持ちでいっぱいになりました。

僕が怪我から学んだ二つめのことは、リハビリで出会ったこの人たちの心の強さです。身体が不自由になっても目標をもって前向きに努力し、自分のできることを見つけようと頑張る人たちがいるのです。自分も苦しいのに、他人を励ますほどの大きな心をもてる人間になりたいと強く思いました。

僕の怪我は、障がいをもつ人が安心して暮らせる社会を作るために、またその人たちの支えになるために何かしたい、と僕に目標を与え、視野を広げてくれる貴重な経験になりました。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

介護老人福祉施設での出会い

洗足学園中学校（川崎市高津区）

一年 田中 あずき

よだれをたらしているおじいちゃんがありました。爪の隙間が茶色になっているおばあちゃんがありました。車椅子にのっている人が多く、歩いている人も杖を使っている人がほとんどでした。どのおじいちゃんやおばあちゃんもここにこしながら私たちを見ていました。

「介護老人福祉施設」という母が勤める施設に私と私の二歳下の弟が行った時のことです。車椅子に乗っている人と話すのも初めてで、「かわいいね。こっちおいで。」と呼ばれ、近くに行くと、おばあちゃんに手をぎゅつと握られました。ぎゅつと握られすぎて「痛い。」と一瞬思いました。びっくりして母を見ましたが、他のおじいちゃんと話をしています。目の前のおばあちゃんは、ここにこしながらずっと私の手を握っています。「お母さん気づかないか

な。」と思ひながら、手を握られるままにしています。弟はおじいちゃんに抱っこされていくようにした。そのおじいちゃんもにこにこしていました。母ではなく、他の職員さんが、「泣かせちゃ駄目ですよ。」と笑いながら通り過ぎていきました。

改めて周りを見るとほとんどのおじいちゃんやおばあちゃん、そして周りの職員さんも私たちを笑って見守っているようでした。先ほど「痛い。」と感じたその手にもおばあちゃんの手の温かさが伝わってきました。「かわいいね。かわいいね。」何度も何度もつぶやいてくれます。他のおばあちゃんが「こっちにもおいで。」と呼んでくれます。手を握りながら「何歳？」と質問がありました。答えようとしたけれど、すぐに「こんなに若い手をにぎったら若返るね。」と話していました。横を通る職員さんが「いつもと違ってずっとにこにこしていますね。子供の力は絶大ね。」と言って通り過ぎていきました。

初めて会ってびっくりしたり、痛いと思つたことが少し恥ずかしくなりました。初めて出会つたおばあちゃんの方がこんなにも私達を歓迎してくれているのにも思いました。よだれや茶色の爪を見て躊躇してしまつた自分の心が少し恥ずかしくなりました。まだその人のことを私は何も知らなかつたのに、その人の見目で判断しようとしていました。見た目では何も分からないのに。握っている手の温かさや笑顔が私を少しずつ安心させてくれました。その人のことを知るとより身近に感じます。その時見かけだけではなく、いろんな人のことを深く知るようにしたいなと思ひました。見かけや他の人からの評判ではなく、自分自身がいろんな人と関わっていききたいと思ひました。

福祉という特別な人が対象になっている気持ちになります。でも手をつないだおばあちゃんのように、私はその人のことを知ることから始めたいと思いました。どんなことが好きなのだろう、どんな風に今感じているのだろう。

それから母が忙しく、母の職場には最近行けていません。手をつないだおばあちゃんは元気に暮らしているようです。また会いに行きたいです。あのおばあちゃんの笑顔や手の温かさがなつかしくなります。



最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

お兄さん、手伝って

秦野市立鶴巻中学校

二年 安田 洸志朗

私の学校では中一の総合学習で職場体験があり、私はあるスーパ―に派遣された。そこで商品陳列、バックヤードでの作業、お客様のお手伝いなど色々な経験をした。その時、一人のおばあさんに出会った。品出しをしていた私に「そこにいる学生さん、手伝ってくれない?。」おばあさんが声をかけてきた。「買い物メモしてきたんだけど、どこに何があるか分からない。」と言ひ、困っているように見えた。持病で歩きすぎると腰が痛むとも言っていた。

スーパ―は一つのお店で多種多様な商品があるので、自家用車のない高齢者にとってはあちらこちら行かなくても済むというメリットがある。しかしおばあさんのように商品が多すぎて目的のものが見つからない、英語やカタカナ表記が多くて中身がわからない、商品の位

置が高く手に取れないなど、どちらかと言うと若者には利便性が高いことが、高齢者にとってはデメリットになっていることが少なくないのが現実だ。先ほどのおばあさんも気になり手に取った商品の説明書の文字が小さすぎて読めないため、私が読むことで納得し、「いつもあなたのような店員さんがいてくれると私も助かるし、買い物がもっと楽しくなるわ。」と笑顔で帰られた。私は驚いた。品物一つ買うだけでこんなにも苦労している高齢者がいるなんて。我々にとつては欲しいものが手にできるスーパーが高齢者にとつては品物一つ買うのに苦労している現状がある。

では社会的弱者といわれる高齢者にとつて優しいスーパー、商店とはどのようなものであろうか。

私が知っている八百屋さんは高齢のおカミさんが家族と経営しているのだが、他の商店には見られないサービスがある。三千元以上の買い物で無料配達、時には配達コースに近い高齢者自身を送迎することもある。野菜は物によっては数人で小分けにできたり、すいかなどは最小八分の一販売もある。時には提供品のヨーグルトを配っていたりもする。高齢なおカミさんだからこそ自身の発案だったり、お友達の高齢者の生の声を生かしているのである。

そういえばその店は外国人の姿も多く見かける。マンゴスチン、スターフルーツ、ライチ、パッションフルーツなど珍しい南国の果物のおいしい食べ方、食べ頃の見分け方を東南アジアの方々に尋ねたり、顔見知りの留学生には同じ野菜の和食の食べ方、作り方を教えていたりする。高齢者に優しい商店は誰にでも利用しやすいということの表れなのだろうか、いつ

も様々な人でにぎわっている。

まずは社会的弱者が何をどう困っているのか、生の声を聞き、実態を知ることから始め、前出のおばあさんのような生の声を社会が拾い上げ、何を具体的に改善すべきかである。そうすることにより今後の超高齢社会は住みやすいものにできるのではないか。そしてそれは社会的弱者や外国人にとっても優しい社会につながるのではないか。

これを機会に今後は自身も高齢者目線に立った物の見方、とらえ方をするように心掛けたい。例えばスーパーや商店で困っている人はいないか、券売機の買い方やチャージの仕方、乗り換え案内などできることはお手伝いしよう。願わくば世の中の全ての人々が社会的弱者目線に立った物の見方、とらえ方をできるようにして欲しい。



最優秀賞

神奈川新聞社長賞

自分にあたえられた人生の課題

平塚市立旭陵中学校

三年 星野章太

頑張ってもうまくいかないことがあったのはこのためだったのか。

僕は今「脊髄小脳変性症（遺伝性痙性対麻痺）」という難病に向き合っています。中枢神経の変性疾患で、両下肢のつっぱりと筋力低下を主徴とするもので根治治療はないそうです。

小さい頃から歩き方に特徴があるので母に「足のはこび方に気を付けてね」とよく言われてきました。自分では普通に行っているのにどうして常に指摘されるのか分からず、言われる事が苦痛でした。体を動かす事は大好きですが、長時間、運動をしていると足が言うことを聞かなくなります。新しい靴を履いてもすぐに底に穴があきます。どうしてなのかと思ってきました。靴が簡単に作られているのかと思っていました。自分がそれだけ

足をうまく運べていないのでした。この心のモヤモヤを解決に導いて下さったのは中学二年生の時の担当の先生です。自分の歩き方などを気にかけて下さり病院へ行くことを進めて下さいました。母も僕の足に不具合があるとは思いながらも何かクセのようなものだろうと思っていたところ、その様なお話をいただいた時、正直驚いた様でした。

病院で詳しく診ていただいたところ、この難病であるということが分かりました。どうして自分は歩いているだけで転びやすいのか、ただ座っているだけで足がけいれんするのかずっと悩みだった事に、納得のいく答えをいただけて、まるで長い間完成しなかったバラバラのパズルが一気に解けた様な気持ちになりました。

しかし、同時に人生における重大な使命を与えられてしまったという、もうひとりの自分に出会ってしまったという複雑な気持ちにのみ込まれました。現実を突きつけられて、今まで不具合がありながらも何とかやってこれていた事も、ある時から自分の中では普通ではなくなってしまうました。

長い人生のまだスタートラインに立とうともしている僕に、描いていた未来に制約を受けような、様々な生きてゆくためのルールが与えられてしまったからです。

大人になってから歩けなくなる可能性があるので、今からできることはしっかりとやっていこうと主治医に言われ、リハビリは毎日欠かさずこなさなければならずその事を自分の中で早く受けとめようとすればするほど、心と体がちぐはぐになっていくのが分かりました。そんな時、担任の先生が言って下さった言葉を思い出しました。それはまだはつきり診断をい

ただく前だったので、「あなたはこれから長い付き合いになるものと向き合わなければいけないかも知れないけれど、自分の中でそのものと仲良くやってゆくことを考えなさい」と。言われた時は、何のことやらさっぱりでしたが、この状況になって初めて先生の言葉を理解し、自分を前向きにとらえようと思うことができました。「仲良く」が正に今自分の病と向き合うために必要なことだと思いました。

リハビリも毎日つづけるのは正直辛いです。疲れます。でも、理学療法士の先生には、努力は裏切らないから頑張りすぎずに頑張ろうと言われ、本当にそうだな、自分のために自分が努力してあげなきゃいけないと思えるようになりました。

この病氣と診断されてから自分の中で新しい何かが始まりました。それによりまたたくさんの方との出会い、お世話になり、力強さを感じます。

「仲良く」を軸に、これからの長い時間をもうひとりの自分と向き合い、決してあきらめないことを誓いたいのです。

最優秀賞

ふれあい賞

憧れの職業に

南足柄市立南足柄中学校

三年 奥津 ひな

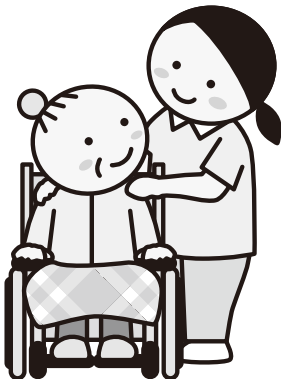
私は小さい頃、看護師か介護士になりたいと思っていました。何故なら、そのような職業の人を間近で見る機会が多かったからです。小学校二年生の時、耳の手術をする為に入院しました。年齢的にもまだまだ家族が恋しく、夜、消灯の時間になると必ず泣いてしまう私のもとに、毎晩看護師さんが来て私が眠るまで隣に居てくれました。長期の入院だったので、看護師さん達と親しくなりたくさんの話をきかせてくれました。いつも笑顔で患者さんと接つる看護師さんを見ているので、自然とその職業に憧れを持つようになっていました。また、私には二人の曾祖母が居ます。一人は去年亡くなり、もう一人の曾祖母は今、入院しています。二人共デイサービスに通っていて、お見舞いに行くと甲斐甲斐しく働いてい

る介護士さんの姿を見ることができました。その様子を見てみると、とても慌ただしく、休む暇もなくとても忙しそうでした。それでも、私達家族やデイサービスの利用者さん達と接する時は笑顔で、どんな事にでも嫌な顔もせずに対応していました。私の曾祖母について尋ねると、こと細かく教えて下さり、ひとりひとりの様子をしっかりと見られていることが分かり、本当にすごいと思いました。曾祖母が家に帰って来ているときは、祖母が曾祖母の世話をするので、私はその手伝いをします。私に出来ることは本当に限られています。ほんの少し手伝ったり、祖母が介護を一生懸命にしているところを見るだけで、その大変さがよく分かります。きつと介護士さんは、私が見た大変さの何倍も大変な思いをしているのだらうと思います。そんな介護を受けている曾祖母は、何か手伝ってあげると、いつも申し訳なさそうに「すみません、すみませんね、」と言ってきます。私は曾祖母に謝まられることをいつも悔しく思っていました。折角頑張ったのに、謝まられても嬉しくないからです。なので私は、ありがとう、と言ってもらえるように、と思い積極的に手伝いをするようになりました。ある時、いつものように曾祖母の薬の準備をしていると、私に「ありがとう」と言いました。いつもならば謝っているのに。私はその時、言葉にならない位、嬉しくなりました。それが単に、目標を達成できたことが嬉しかったのかは分かりません。それでも本当に、嬉しかったのです。その時、介護のやりがい少し、触れることができたと思えました。それ以来、曾祖母と話すことが増え、私の知らない昔の話がきけるその時間をとても楽しく思っていました。このように、私は小さい頃から介護や看護の仕事に触れてきたので、これらの仕事に

憧れを持ち、あのようになりたい、と思えたのです。

今、介護士の不足が問題になっています。介護士という仕事はとてもハードではありません。その「介護士の仕事は大変」というイメージが強いからこそ、なり手がいなくなってしまうのでしょうか。確かに、介護という仕事は大変です。しかし、実際にやってみれば感じるこのとができる「やりがい」にも目を向けて欲しいです。イメージだけで億劫にならず、体験してやりがいに少しでも触れることができたなら、私のように興味を持つ人が増えると思います。この仕事に触れる機会がもっとあれば良いと思います。

私が家族に、介護士になりたい、と伝えたとき、強く反対されました。すごく大変な仕事だから、と。そのため、将来の夢は？と聞かれても、介護士とは答えません。それでもまだ、私は介護士に憧れています。



最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

僕にできること

伊勢原市立中沢中学校

一年 白鳥陽也

この前、家族四人でレストランに行った。そのレストランには写真が載っているメニュー表はなく、すべてタブレットでの注文で食べ物が届くシステムだった。これは、店員を呼ばずに、自分の好きなタイミングで注文ができるため、お父さんとお母さんは「楽だね」と言っていた。自分も注文する時に使ってみた。操作しやすく、自分が注文したいメニューにも、簡単にたどり着けるので便利だと思った。

以前おじいちゃんで行ったレストランでの事を思い出した。そのレストランもタブレットで注文するお店だった。おじいちゃんは注文する際、操作方法が分からず困っていたので、僕がおじいちゃんに代わって注文した。

僕や親にとっては使いやすく、便利なものであっても、高齢者にとっては、使いづらくて不便なものになってしまいう事があるのだと感じた。携帯電話のスマートフォンも同じだ。僕や親にとって、スマートフォンは当たり前だが、高齢者には、昔のガラケーを使っている人が多い。僕のおじいちゃんも、「画面操作はよく分からない」と言ってガラケーを使っている。社会には、高齢者にとって、不便で分かりづらいものが他にあると思った。

例えば、駅だ。改札は、自動改札がほとんどだ。自動改札機に何度も切符を入れるが、バーが閉まってしまい、困っている高齢者を何度か見掛けたことがある。

また、切符を購入するにも、ほとんどの券売機がタッチパネル式になっている。タブレット操作に慣れていない高齢者にとっては分かりづらい機械だと思う。昔は駅員さんに紙の切符を差し出してハサミで切り込みを入れてもらってから、改札を通っていたと聞いた。しかも今は、パスモなどのICカードに変わってきている。ますます、高齢者にとっては分かりづらくなっているのではないかと思う。

この前、東京駅に行った。東京駅には、多くの電車が乗り入れるので駅の中には案内表示がたくさんあった。僕たちの家族は、お弁当売り場を探していたが、カラフルな案内表示がありすぎて、すぐに見つける事が出来なかった。結局、駅員さんに聞いてたどり着くことが出来たが時間が掛かった。僕たちも分かりづらいと感じるのだから、高齢者にとっては、もっと分かりづらいのではないかと思う。

駅は、タッチパネル、自動改札、案内表示など、僕たち若い人には便利でも、高齢者にと

つては使いづらくて不便なものがあふれていると感じる。

先日テレビで、高速道路での高齢者の逆走事故のニュースを見た。出口と入り口の案内表示の見づらさが原因の一つではないかとテレビのコメンテーターの人が言っていた。

色々なものが高齢者にとって親切ではないのかもしれないと感じた。

このように僕たちが暮らす社会は、僕たち若い人や親の世代にとって、便利さを追求し、暮らしやすく変わってきている一方、高齢者にとっては、暮らしづらくて、不便な社会になっているのかもしれない。

これから日本は、ますます高齢者の人口が増えると学校の授業で学んだ。便利さや使いやすさを求めることは必要なことだと思うけれど、子供から高齢者誰もが、分かりやすく簡単に使え、暮らしやすい社会になれば良いと思う。

僕は、僕が出来ることをやっていきたい。まずは、僕のおじいちゃんとかくさん会話をして、手助けをしたい。また、困っている高齢者を見掛けた時は、優しく声を掛けて、使い方などを教えてあげたい。みんなが高齢者に優しい社会は、高齢者にとって暮らしやすい社会だと思ふから。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

どんな障害者も友達

鎌倉市立岩瀬中学校

二年 原 有穂

小学生のときに、耳が不自由な子と出会った。彼はいつも特別学級で勉強し、週に何度か一緒に授業を受けた。しかし、彼と仲の良い友人は少なかった。なぜなら、彼と接するには手話を使わなければならなかったからだ。私は手話に興味を持ち、簡単なものから覚えていった。彼と初めて会話したときはとても感動したし、次第に彼とも仲良くなれた。頼ってくれるようになってからは、給食と一緒に食べたり、一緒に授業を受けたりするようになった。私も手話の本を買って何度も読んだり特別学級の先生から教わったりした。私たちは誰がどう見ても友達だと思っていた。

ある日、友達に

「三年生になってから急に彼を手伝うようになったけど、先生から頼まれたの。」

と尋ねられた。私はとっさに、

「ただ好きでやっているだけで、頼まれてないよ。」と答えたが、本当はびっくりしていた。自分では友達の間で感じた。でも周りから見ると、それは障害者を手伝う仕事をしている人だった。また別の友達からは、

「世話をすることが好きなんだね」

と言われた。たしかに幼児の世話をすることは好きだ。でもそんなつもりで接しているのではない。私はその後、彼とこのままの接し方で良いのか悩んでしまった。彼は耳が不自由なので話すことができない。だから、彼は私と仲良くすることが周りから仕事だと思われる事を知らないし、実際友達だと思ってくれているかどうかともわからなかった。とはいっても、わざわざ先生が席をとりにしてくださったり様々な配慮をしてくださったので、突然友達をやめるなんてことはできなかった。私も友達でいたかった。だから、友人に尋ねられたことは無かったことにして、普段通り仲良くしていた。

今、私たちは、障害者を障害者としかみれていないと思う。障害をもっている人を、可哀想とか、周りの人は大変だろうとか考えて、「助ける」とか「手伝う」ということばかりしているのではないだろうか。そして、自分は本当に良いことをしたと思ひ、周りの人も「手伝っていてえらい」「優しい人だ」と思うにちがいない。もちろん、これは本当に良いことだし、こんな行動をした自分を誇りに思ってもいいと思う。でも私は、障害者も「友達」として接

するべきではないかと考えている。つまり、障害者は「少し不自由なところを持つている友達」なのだ。障害者を障害者とみていると、それは行動すべてがお手伝いになってしまふ。例えば、その人の教室へ二人で歩くと「送り届けてあげた」ことになるし、授業中先生の話を手話で訳すと「先生のかわり」になってしまふ。でも、これが友達としての行動なら、その人の教室へ二人で歩くことは「普通のこと」だし、授業中先生の話を手話で訳すことは「勉強を教えている」だけだ。みんながこの考えを持つていけば、障害者の方々と私たちはもつと身近になれるし、わかり合うことができると思う。私が小学生のときに経験したことは、友達が障害者を障害者としてみていたからあんなことを疑問に思ったのだろう。私は、もつと色々な人に、障害者について深く考えてほしい。どんな重い障害を持つていても、同じ人間だから友達だ。とはいえ、やはり普通に接しようとする中でわかっていても、難しい部分はあると思う。でも、相手に対して「障害者じゃなくて、友達として接しよう」という思いは、きつと相手にも伝わっている。だから私は、たくさんの人に、この考え方を伝え、障害者への理解を深めていってほしい。

神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

ひいおばあちゃんとおわたし 百才までガンバレ！	横須賀市立望洋小学校	一年	相場碧夏
しょうがい者ふくしについて考えたこと	横浜市立小田小学校（金沢区）	三年	山田結心
みんなを支える	秦野市立本町小学校	三年	児玉らいむ
あまい香りが教えてくれた大切なこと	川崎市立宮前小学校（川崎区）	四年	村上蓮
参加する福祉と届ける福祉	平塚市立みずほ小学校	四年	三田果和
意識を変えよう	開成町立開成小学校	四年	今西美好
私に出来る事	開成町立開成南小学校	五年	府川拓夢
駅　く可能性を広げる場所く	開成町立開成小学校	五年	小沼宥輝
福祉と私たちの世界	湯河原町立東台福浦小学校	五年	石井千波
	大井町立大井小学校	六年	浅野ゆうな

準優秀賞

「ふくし」のスタート

「だいじょうぶですか？」

わたしと男の子

ぼくのほちようき

みんなで広げよう！助け合う喜び

「ともに生きる」ことについて考えた

私たちが作りあげる世の中

誰もが安心して過ごせる社会に

私にできる事

伝えることの大切さ

小田原市立山王小学校

一年

鈴木志歩

横浜市立三ツ境小学校（瀬谷区）

二年

林夏煌

厚木市立毛利台小学校

四年

増田百華

寒川町立小谷小学校

四年

池田光汰

カリタス小学校（川崎市多摩区）

五年

石井七葉

開成町立開成小学校

五年

遠藤陽世

横浜市立東山田小学校（都筑区）

六年

多畑菜々子

横浜市立川上小学校（戸塚区）

六年

小林ひかり

横浜市立三ツ境小学校（瀬谷区）

六年

田中美結

海老名市立杉本小学校

六年

林叶栴

中学生の部

優秀賞

答えをさがして	相模原市立大野北中学校	一年	齊藤悠斗
私の大切な祖母	相模原市立串川中学校	一年	佐藤真衣
僕が今出来ること	厚木市立南毛利中学校	一年	飯田慶生
介護「される」を考えて	横浜市立南高校附属中学校(港南区)	二年	市川千弦
涙の訳	大磯町立国府中学校	二年	二宮珠生
祖父を通して教えてもらったこと	小田原市立泉中学校	三年	保田華奈
第二の人生	寒川町立旭が丘中学校	三年	大角太郎
人の心を繋げた桜	大井町立湘光中学校	三年	中澤裕香
友だちが教えてくれたこと	開成町立文命中学校	三年	草柳紗希
妹から学んだこと	開成町立文命中学校	三年	高橋美妃

準優秀賞

思いやりの心

福祉とは

皆の目と私の目

特別ってなんだろう

皆が活躍できる社会を目指して

子どもたちに会い、学んだこと

魔法の言葉でつなぐ

一人の人間であるということ

すべての子どもが守られる為に

歩幅を合わせる

厚木市立玉川中学校

伊勢原市立中沢中学校

三浦市立初声中学校

秦野市立南が丘中学校

横浜市立東鴨居中学校(緑区)

川崎市立白鳥中学校(麻生区)

鎌倉市立岩瀬中学校

秦野市立本町中学校

伊勢原市立伊勢原中学校

大井町立湘光中学校

一年

一年

二年

二年

三年

三年

三年

三年

三年

三年

加藤 美紗希

浅賀 悠作

西塚 奏琉

新井 ひかり

今井 珠代

栗山 健志

野口 菜々

山田 瑠々

長谷川 朋世

長坂 菜子

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 30 年度版

平成 30 年 12 月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2

電話 045(312)4813

印 刷 神奈川県新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会